

八代目市川團十郎自殺

嘉永7年(1854)8月6日、美貌の俳優として名高い八代目團十郎が自殺しました。享年32歳。市川團十郎家は、八代目の父である七代目が名優であり江戸歌舞伎と言えば市川團十郎という印象を現在まで残した人物です。七代目の有名な逸話として、八代目に跡目を譲って自らが五代目市川海老蔵を襲名する時に披露した『歌舞伎十八番』が、市川團十郎家のお家芸になるとともに、この歌舞伎十八番の台本を襲名披露当日まで関係者以外に見せないように箱に入れて厳重に保管していたことから、自分の特技を「十八番(おはこ)」と言うようになった。

嘉永7年の時点で、五代目市川海老蔵は天保の改革に反発し派手な生活を送っていた咎で江戸から追放されて三河(愛知県東部)に住んでいました。

さて、八代目の自殺前の行動ですが、7月1日に江戸深川の自宅を出て6人の供を連れて、父のいる三河に向けて出発しました。9日に親子対面を果たしています。

この翌日から名古屋に滞在し、閏7月1日に舞台を行い23日の千秋楽までをこなしました。そのまま海老蔵と共に大坂に向かい、28日の夜に大坂に入ります。

この時の大坂での歓迎ぶりは大変なもので、船で道頓堀に入った一行を数万人の民衆が迎え、「八代目！八代目！」との歓声が上がっていたのです。

翌日から、大坂公演の勸進元である植木屋久兵衛の屋敷に、五代目海老蔵・八代目團十郎・市川猿蔵(八代目の弟)が宿をとりました。

8月1日、食事に招かれて親子三人で出掛けますが、八代目は「気分が悪い」と言って中座。2日3日は稽古4日に開幕となるが、八代目は寝坊をして起きた時には三番叟(OPセレモニー)が終わったとの報告を受け、座頭だった八代目？(五代目海老蔵では)は激怒。

6日の公演初日に向けて5日に諸注意があり、植木屋久兵衛宅に戻り2階の自室に按摩を呼ぶ。按摩が帰った午後10時頃から翌朝までの間に八代目は脇指で喉を2回切って自殺したのです。八代目の傷は喉の右側に3センチ、左側に5センチ程度で、うつぶせの状態で見つかりました。自殺の動機は、諸説ありますがいまだに謎のまま、歌舞伎界最大のミステリーともいわれています。動機として有力だったものとして、八代目の遺書とされる文書があり、ここには

「父への慰問のつもりで三河を訪れたのに、江戸の座元に許可を得ないままで名古屋の舞台を行い、父の友人である植木屋久兵衛から大坂でも演じてほしいと懇願され、断れなかったのが大坂にきてしまい、江戸への不義を感じて死ぬ」とのことが書かれていました。

しかし八代目の遺書はその後も多く見つかり、これは早い段階での創作だとされています。八代目は、美貌の持ち主で、八代目が吐いた痰を若い女性は懐紙に包んで「團十郎様御痰」として錦の守り袋に入れて持ち歩いたという話が伝わっています。それでありながら厭味はなく、澄ました態度なのに憎めない愛嬌がある、そして色香があって上品だったので同性にも好かれたそうです。そんな人物だからこそ、その死の衝撃から多くの憶測が生まれ、偽の遺書まで書かれたのでしょね。

ちなみに八代目の死を聴いた父の海老蔵は「バカ野郎め」と口にしたらあと湯屋で湯につかり、その後で八代目の元に向かったと言われています。これを江戸の役者の粋と感じるか、親子の確執とを感じるかでも自殺の動機としての説になっています。

八代目市川團十郎と十一代目市川團十郎は美男の歌舞伎役者でした。

十一代目が海老蔵時代は、女性ファンは「海老断ち」と言って海老を口にしなかった様です。海老様に悪いからと、海老のすしや天ぷらを食べないのでお店も困った様ですね。